2019 年ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア活動報告

日時：2019 年 2 月 7 日～10 日
場所：フィリピン共和国首都マニラ市近郊スラム：ナボタスエリア・トンドエリア

医師	1 名
歯科医師	24 名
看護師	3 名
歯科衛生士	11 名
歯科技工士	3 名
歯科助手	4 名

学校教員	2 名
一般参加者	16 名
高校生	64 名
中学生	4 名

現地参加者：132 名
現地通訳：18 名
現地スタッフ：約 100 名

現地物資配布内訳（一人につき）
「歯ブラシ 10 本・タオル 2 枚・固形石鹸 2 個・お米 2 キロ」×850 人分

物資配布

	2月7日	2月10日	計
物資配布	２５０名	６００名	８５０名

医療奉仕活動

	2月8日	2月9日	計
クリーニング	１２４名	４２７名	５５１名
保存	５０名	６５名	１１５名
抜歯	１６８名	２０２名	１１８名
義歯（入れ歯）	５名	７名	１２名
耳鼻科	５８名	８６名	１４４名
シャワーブース	２５６名	３５０名	６０６名
投薬のみ		１名	１名
合計人数	６６１名	１１３８名	１７９９名

2 月 7 日　物資配布活動・器材準備

　現地時間ＰＭ13：30。マニラ空港に到着後、私たちは 2 班に分かれました。
1 班は中高生、初参加の一般の方及び各支部高校生担当者、撮影班、2 班は器材、材料担当者及び医療関係者に分かれ､1 班は物資配布活動、2 班はホテル内で器材準備や明日からの医療奉仕活動の準備をおこないました。

物資配布活動「RIZAI STADIUM LEVERIZA PASAY」

　この地域は私たちが毎年宿泊しているマニラ市内のホテルからわずか 2～3 分の所に位置しています。
　このエリアは人口約 1 万人で住民たちは主にトライシクル（バイクタクシー）や物売りなどで生計を立てています。一日の平均収入が 500 ペソ（日本円で約１０００円）です。

　政府の政策により周囲には無料の公立の小学校や病院が建設され、少しずつ生活は良くなってきています。しかし、マニラの市街地でありながら、未だ歯ブラシやタオルなどの生活物資の支援を求める人たちが大勢存在し、街中を裸足で駆け回るストリートチルドレンも未だ多く見られます。

　ここでは私たちと長年活動を共にしている現地チーム「マニラ・ラハ・ソライマン・ロータリークラブ」のメンバーと共に、このエリアの最貧困層約 250 世帯にお一人「歯ブラシ 10 本・タオル 2 枚・固形石鹸 2 個・お米 2 キロ」を支援しました。
　会場は大きなショッピングモールに隣接する駐車場を利用し、中高生を中心に一人ひとり手渡しで物資をお渡ししました。

私たちが到着するのを何時間も前から待っていてくださり、とても陽気な笑顔で迎え入れてくれました。

その笑顔に始めは緊張気味だった高校生たちも緊張がほぐれ皆さまからご協力いただいた物資をしっかりと手渡すことができました。

2 月 8 日　医療奉仕活動 1 日目「NORTH BAY EAST AREA」

今回の活動エリアは、マニラ市中心部から車で約 40 分、マニラ湾に面した Navotas という地域です。ここは東南アジア最大の漁港といわれており、古くから漁業の町として栄える反面、海洋水路の発達は密輸や麻薬などの流通経路として利用され、国内でもとても治安の悪いエリアとされていました。

しかし、近年は政府の政策により劇的に変化を遂げ、私たちが以前訪れた時とは比べ物にならないほど街並みが綺麗になり、住民の多くも徐々に職に就くことができその内 70%は漁業関係もしくは造船などで生計を立てています。

今回の活動場所は政府がスラムの住民や路上生活者の生活改善、治安維持の一環として推進し、建設された公共のアパートが立ち並ぶエリアです。

ここには 1380 棟に約 9000 人の人たちが住んでおり、入居費用や家賃などはなく、その代わり建物

全体のメンテナンス費用（共益費）として 1 か月 300 ペソ（600 円程度）を支払います。ここでは 1 家族に 2 人の就労者がいると仮定して一日約 500～600 ペソの収益のため、ここの共益費を支払うことはなんとか可能ですが、3 か月未納になると督促状が届き 1 年間の猶予のなかで支払わなければならない仕組みになっています。

また、行政もこの地区の貧困改善のために、漁師は使用する漁船を国から 5 万ペソ（10 万円程度）でローンを組むことができ、網は国が無料で支給しています。そして子供たちにも漁の技術習得のための資金援助や学校を設立し、「教育」と「労働」によって犯罪の芽を摘んでいます。

しかし、万が一家族内に犯罪者が出た場合は、全員が公共アパートから即退去しなければならず、そのため不定期で市の職員がチェックをしています。

治療会場は住民たちの憩いの場でもあり避難場所でもあるバスケットコートを利用しました。海沿いの地域であるため台風や大雨の際には周囲がすぐに冠水してしまいます。そのため建物はコンクリートの壁に囲まれ少し高い土地に建設されているのが特徴です。

会場には朝から多くの人たちが列をなし治療開始を待ちわびている中、ここの Navotas 市長もハロアルの活動に心から感謝をしたいと激励にやってきてくれました。

治療内容はやはり抜歯や義歯の作成依頼がとても多く、生活が改善傾向にあるとはいえ、住民たちのお口の中はボロボロです。特に子供たちの奥歯「第一大臼歯（6 歳臼歯）」の抜歯が多く、会場では幼くして多くの子供たちが大切な体の一部を失っていきます。

ここでは継続的な治療の有無や器材・材料などの問題から、痛みのある歯は抜歯を選択するしかありません。そして慢性的栄養不良のスラムの子供たちの中には立った 1 本の虫歯の菌が全身に波及し死亡してしまう子も少なくはありません。そのため貧困地区での「抜歯」は単に痛みをとるというだけではなく、命を救う治療にもなっているのです。

2月9日　医療奉仕活動2日目

「UPSKILLS FOUNDATION : BARNGY 105 VITAS TONDO」

医療奉仕活動2日目は「TONDO（トンド)」です。

ここは1980年代後半まで「東洋一のスラム」と呼ばれたゴミの収集所「スモーキー・マウンテン」があったエリアです。

フィリピンでは当時、日本のような細分化されたゴミの分別や焼却システムがなくそのほとんどを埋め立てていました。ここには毎日マニラ市内から約3,000トンものゴミが運ばれ、鉄くずやビニール、プラスチックなどが長期的に放置されることによって化学反応を起こしゴミの山から出る噴煙の様からその名が付きました。

そして、そのゴミ山の周辺には「スカベンジャー」と呼ばれるゴミを拾ってお金に換金し生活をする人たちが沢山住んでいます。

彼らは主に地方から首都マニラに職を求めてやってきます。しかし、容易に職に就くことはできず、治安の悪い都会での物乞いより、このゴミ捨て場の住民となって安定したゴミの供給で生活をするほうがはるかに良いといいます。

現在この場所は閉鎖されて別のエリアに移りましたが、いまだ数千人のスカベンジャーが生活をしています。

このエリアは10年ほど前から医療奉仕活動の拠点ともなっている地域で、毎年場所を変え様々なバランガイ（集落）で活動をしています。

今回はバランガイ105です。この集落は約22,000人が暮らしており主に港で荷物を運ぶポーターや建築関

係、中には調理用ニンニクを剝く仕事（1キロ10ペソ（約20円））や、やはりゴミを拾いながら生活をしている人たちも多くいます。

また、現在フィリピン国内で定められている一日の最低賃金は510ペソ（約1,200円））に対し、ここでは一日一人平均100ペソほどしかありません。

そしてこの地域はフィリピン国内でも最貧困層のスラムであり、夜になれば銃犯罪や薬物などの犯罪が多発し、何かから逃れるようにスラム居住区内では昼間から妊婦や子供までもがシンナーを常用している者も多くみられます。

このエリアで病気になれば無料のクリニックに通うことができますが、週に一度しか治療を受けることができず、一日数人程度で薬の種類も少なく、無い場合は自分で購入しなければならないためほとんどの住民が治療を断念します。

集落のリーダーに「この地域に今一番必要なものは」と尋ねると彼は「教育と医療」と即答しました。そして「こんなにも大きな規模の歯科ミッションは初めてです。なんて幸運なのだろう。そして沢山の人が治療をしてもらえます。そのうえ歯ブラシやタオル、石鹸まで貰うことができました。とても感謝しています。」と話してくれました。

増設シャワーブース

昨年から私たちの活動に「シャワーブース」が加わりました。

スラムの子供たちは私たち日本人ように毎日きれいな水やシャンプーを使って体や頭を洗うことができません。

そこで地元のメンバーたちと共同で高校生たちを中心に今年は4つのシャワーブースを作り二日間で約600人の子供たちを洗うことができました。

スラムでは水はとても貴重な存在になります。上下水道などのインフラ整備はほとんどなく、子供たちは体が汚れれば海に飛び込み水浴びをしながら洗うか、スコールの時に外に出て屋根伝いに流れ落ちる雨水を使うしかありません。そして石鹸1個が貴重なスラムでは毎日を清潔に過ごすことなど不可能です。

そこで昨年から地元ロータリークラブのメンバーの依頼もありこの活動が始まりました。高校生たちが順番に子供たちの頭や体を洗います。子供たちも初めての経験に会場は大騒ぎです。

2月10日　活動最終日　物資配布活動「KAINGEN KAWIT CAVITE」

活動最終日は既に10年以上支援をしている「カビテ市」にある集落に向かいました。午前9時30分、私たちが会場となるバスケットコートに到着すると既に数百人の住民たちが待っています。ここでは「歯ブラシ10本・タオル・2枚・固形石鹸2個・お米2キロ」を約600人に配布いたしました。

住民の皆さんからは口々に「先生、去年も来てくれたじゃない、今年もありがとう。」とほとんどの人たちがハロアルを覚えてくれていました。私が「このお米は今日食べるの？」と尋ねると「もちろん！」と嬉しそうに答えます。

ここでは中高生全員で600人お一人お一人に物資を手渡していきました。

ふと会場を見ていると、ひとりの女性がお米の入った袋を落としてしまい、バスケットコートにそのお米が大量にこぼれてしまいました。彼女はとても悲しい顔をしてこぼれたお米を見つめています。私がもう一袋彼女に渡すと、満面の笑みを浮かべ何度もお礼を言いながら去っていきました。すると、すぐに小さな男の子がやってきてその床にこぼれ埃だらけのお米を素手でかき集め始めました。それも一粒の残らず・・・。

私は言いようのない気持ちになりました。
会場では高校生たちが一生懸命笑顔で物資を配ってくれています。そして最後の住民が物資を受け取るころ、誰にも気づかれることなく少年は落ちた米を拾い終えスラムに帰っていきました。

感謝を込めて

ハローアルソン・フィリピン医療ボランティアも今年で 14 年目を迎えました。
今年も多くの参加者を賜り、全国から沢山の歯ブラシやタオル、石鹸、文房具などをご協力いただきました。心より感謝申し上げます。
私たちはこれからも皆さまが歯ブラシ 1 本に託してくださる「優しさの輪」をしっかりと現地に届け、フィリピンの恵まれない子供たちのために一生懸命頑張りますので今後とも末永いご協力をよろしくお願いします。